

家庭科の男女共修をすすめる会

# 会報

'86 春

連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11  
婦選会館内 T151

振替 東京九一―一九一八九一

発行 一九八六年三月八日

## \*\*\* 四・五集会と総会のおしらせ \*\*\*

### 男も女も「家庭」も「技術」も！ 四・五集会

四月五日（土）午後一時半から婦選会館で

家庭科の履修のしかたを男女同じにすると  
いうことだけは決った今、早期の、そして完  
全な共修実現のためには、より広く連帯をす  
めること、より深く「あるべき家庭科」に  
ついて考えて説得力ある運動を展開すること  
が必要です。

長年家庭科について技術教育的視点から研  
究して来られた新潟大学の坂本典子さんのお  
話を聞き、家庭科のあるべき姿をより広い連  
帯のしかたについて考えましょう。（この会  
報の2、9ページも参考にして下さい）  
◆参加費（資料代共） 会員四百円 一般五百円

### 一九八六年度 総 会

四・五集会終了後午後五時まで

- I 一九八五年度総括
- II 一九八六年度運動方針
- III 一九八五年度決算

- IV 一九八六年度予算
- V 一九八六年度世話人
- VI その他

## も く じ

四・五集会、総会のおしらせ	(1)
教課審では	(2)
技術科と家庭科のよい関係は？	(3)
やはり家庭科は女子に？	(4)
「男子向き家庭科」ができる？	(5)
「家庭科とは何か」を論じよう	(6)
臨教審と女性民教審	(8)
教研集会報告	(10)
「21世紀への展望と女子の高等教育」	(11)
関西グループでは	(12)
高P連会長は共修賛成！	(13)
連絡会報告	(14)
世話人会報告	(15)
署名をありがとうございます	(16)
家教連でも署名運動	(16)
おねがい	(16)
事務局担当者がかかりました	(16)

### ★会費をどうぞ（一年分三五〇〇円）

健全財政をうらやましがられていた本会も  
八五年度はついに赤字！ 会費の納入が少か  
ったためです。それでも世話人会では、何と  
か値上げしないでがんばろうと、総会に会費  
改定の提案はしないことにしました。同封の  
振替用紙でお早めにごどうぞ！

## 討議のために1

### 教課審では

大西 歩

新しい教育課程審議会が昨年九月に発足したことは、85秋号に掲載しています。

11月5日の第3回総会では、各学校段階別の現状と課題について説明をうけ、議論し、運営委員会の設置を決めています。文部省側は、各学校段階等別の課題として、高校の職業教育では(1)新しい職業教育のあり方に即して教科・科目構成をどう改善するか、(2)「家庭科教育に関する検討会議」報告をうけ、家庭科教育の取り扱いをどうするか、の二点をあげています。運営委員会のメンバーは、福井謙一会長をはじめ、副会長の西原春夫早大総長、中原豊広島大長、奥田真丈横浜国立大教授、幸田三郎恵泉女子短大教授、諸井虔秩父セメント社長、諸澤正道国立科学博物館館長の7人を決めています。

86年1月9日の第5回総会では、音楽、家庭、図工、体育、美術などの現状と課題をめぐり話し合いをしています。「家庭」、「技術・家庭」についての文部省側の示した課題は

(1)時代の進展、家庭生活、社会生活の変化に対応し、家庭科教育をどう見直すか(たとえ

ば、家庭の教育機能の弱体化にどう対応するか、消費者教育、情報処理教育にどう取り組むか)、(2)女子差別撤廃条約との関係で、「家庭一般」、「技術・家庭」をどうするか、(3)指導上の問題点をどう解決するか(たとえ

ば、生活体験が不足していると言いつつ、製作の時間が十分に確保できないことをどうするか、指導教員の能力・指導力の違いにより、教える内容に偏りが生じたりすることについてどう対処するか)などでした。これをふまえての自由討論では、「個人差を考え、選択させることを考えるかどうか」、「奉仕活動の中で、実践的に学ばせることも大切」など意見

が出て、課題別の委員会を設けて検討すべきとする提案もされました。また、体育について文部省側は、高校で男女の時間数が異なるのは問題があり、女子にも男子並みにやらせるべきとの意見があるがどうかとの課題も示しています。

1月20日の第6回総会では、外国語、職業、道徳、特別活動の現状と課題について議論するとともに、今後の審議の進め方について協議しています。職業について、文部省側は理産審答申(職業学科の改善・充実、教育課題の多様化、弾力化、職業教育に関する諸条件

の改善)が指摘した課題をあげています。

今後の審議は、2月7日の第7回総会以降、約半年間、昨年9月文部省側が示した検討の観点、(1)社会の変化に適切に対応する教育内容のあり方、(2)国民として必要とされる基礎的・基本的な事項の指導を徹底するとともに、児童・生徒の能力・適性等に応じた教育を充実させるための教育内容のあり方、(3)幼・小・中・高を通じて調和と統一のある教育内容のあり方、(4)「六年制中等学校」の教育内容のあり方、を議題に審議を進め、10月初めころ「中間まとめ」をすることを決めています。

また、運営委の中で「総会審議だけで物事を煮つめるのは、むずかしい。早急に体制づくりをすべきだ」との声が高まっていたことから、とりあえず「家庭」「技術・家庭」科教育のあり方、「六年制中等学校」の教育内容のあり方、道徳教育のあり方、社会科教育のあり方の四つの課題別委の所屬メンバーは、2月17日に決め、3月ごろ初会合を開くが、教科の専門家らを専門調査員として加える可能性もあります。(その結果は次号)

10月の「中間まとめ」のあとは、委員を定員いっぱい(48人)に拡大し、臨時委員を加えて60人程度の規模になり、88年3月ごろ「審議のまとめ」を公表、同年6月答申という段どりになりそうです。

## 討議のために2

### 技術科と家庭科のよい関係は?

和田 典子

技術教育と家庭科教育は車の両輪

人間の生命活動(生活)をささえるための教育として、両者は車の両輪の役割を果たすものですから、ともに欠かせない教育です。

つまり、家庭科は人間・それ自身の生産・再生産(いのちとくらしの継承・発展)にかかわるちえやわざを教育対象にすえた教科です。技術科は生活資料や生産用具、労働手段など、生活を支えるモノの生産・再生産にかかわるちえやわざを教える教科ですから、どちらも人間が生きていくことと深く結びついています。

したがって、家庭科と技術科はともに欠かせない一対の教科であり、表裏一体をなすものです。また、ひとが生きていく土台となる教科として、他教科の出発点でもあり、統合目標ともなるべき教科です。

#### 技術科と家庭科の相異点

生命を守り、子どもを生み育てるために、ひとは衣食住のいとなみをつづけています。

また異性を求め、愛し合い、弱い人たちとも扶け合いながら生きていますが、その過程ではさまざまな問題解決能力が求められます。

家庭科は、自然・社会法則をこうした生きるいとなみやそれを支える条件づくりにどう生かすかのちえやわざを学ぶ教科ですから、食べる、着る、住まう、育てるなどの生活行為に焦点をあてた学習が柱になります。

一方、技術科では生きていくために欠かせないモノを対象にして、原料や素材、その採取や生産・加工のための道具、機械、装置や手段などが重視されます。

したがって、両者は教育内容が異なり、それにともなう教材や教育の方法がちがってきます。

家庭科の共修が強調されると技術科がへらされるか?

技術教育の男女共修こそ、差別撤廃には欠かせないにもかかわらず、家庭科の男女共修の世論ばかりが盛り上っている、家庭科の単位が増えると技術教育が圧迫される、家庭科の単位はもっとへらすべきだ、と両科を対立的にとらえる意見がありますが、果してそう

でしょうか。

現行教育課程の枠組みをそのまま肯定し、技術、家庭科を一本立てにすることを前提にしている主張ですが、この出発点自体に問題があるように思います。

両科の一本立てに反対し、二本立てを主張する立場から言えば、教科構造そのものにメスを入れることなしに、家庭科、技術科の男女共修は進展しないし、だからこそ枠組み自体の全体的な見直しが必要なのではないでしょうか。

技術教育の拡充だけでは男女平等はすすまない

たとえば、工学部や医学部で専門的技術的教育を受けていても、女性が職場を退く場合の多くは、技術能力が低いからではなく家庭負担との両立に挫折した結果からです。

技術教育の強化だけでは、家庭責任をめぐるところした現代の生活矛盾を切りひらくことに、つながらないことを実証しています。

このことから、家事・育児を対象にしている家庭科教育の男女共修をすすめることが「条約」にいう性別役割分担の克服という問題の打開に、より積極性があるといえるのではないのでしょうか。

### 討議のために3

やはり

#### 家庭科は女子に？

―「選択必修」の危険性―

芦谷 薫

検討会議の報告をうけて教課審で家庭科の新教育課程が検討されようとしています。そこで検討会議の言う「選択必修」とは学校現場ではどのようなのか考えてみましょう。

①他教科と家庭科の科目を並べて男女共選択必修（検討会議第二案）になると

1/22発表の臨教審報告では、各学校での裁量を拡大する方向がうち出されており、臨調路線の点からいっても予算増大など考えられませんが、「他教科」の範囲をうんと広くして各学校で実情に合わせて組み合わせを決めるということが考えられます。

そうすると、普通高校では、体育（格技）と並べての選択が手取り早いのです。現在女子が家庭一般をやっている間男子は体育（格技）をやっているのですから。

男女に自由に体育か家庭科かを選ばせたら、まだまだ性別にとらわれがちな高校生の選択は、男女の片寄りの大きいものになるでし

よう。又選択に際しての教師の説明如何で、限りなく現状に近い状態になることもありま

す。うまく男女が半数ずつ選択しても、半分の男女生徒は家庭科を全く学習せずに卒業す。

芸術や技術と組み合わせる場合、各学校の教員定数は全生徒数で決まりますので、特別な予算がない限り、家庭科と他教科から一科目づつ置く二者択一の形となり、結果は体育の場合と同様になるわけです。

男子校はどうでしょう。前述の学校裁量の拡大という点から考えると、「選択必修」の選択は、学校が行うということも考えられ、家庭科や他教科の科目の中から一科目を学校で選んで全員に履修させることも記こり得ます。今まで設備や教員のなかった男子校ではこのような形で家庭科の授業をやらないでおくこともできます。

②家庭に関する科目の中から男女共選択必修（検討会議第一案）になると

全国高校長協会家庭部会は既にこの案にそった科目と内容試案を作成しています。過去にも発言力のあった団体なので一応注目してみます。

この案では、三つの科目を設定しています。

(1)家庭一般（4単位、趣旨は現行どおりで内

容は改訂。今まで母性教育を強調し続けてきたことを考えると、これは女子向き家庭科なのでしよう。(2)現代家庭（4単位、7単元には新しい内容も含む）男女の家庭科は異なるとしてきた同会ですから、これは男子向き。

(3)生活一般（共通部分2単位、選択部分2単位）。

(1)と(2)は抱き合わせで男子女子の選択、(3)は単独に置いて選択部分で男女を分けようというところらしい。学校によってどちらのタイプを選ぶか決めるようにということらしい。

(1)(2)の抱き合わせでは、男女別々の内容で必修ではありませんね。(3)は一部可能性有りというところでしょう。

さて、男子校では、検討会議報告の一案の中の「なお、この場合は、当分の間、地域や学校の実態に応じ他教科での代替履修を認めることも必要であろう」が根拠となり、家庭科の時間をつくらなくてもよいことになりま

す。

このように「選択必修」という言葉の必修にまどわされないように御用心！ 必修の可能性は極くわずか。現行のなかで頑張っ

### 討議のために4

#### 「男子向き 家庭科」

ができる？

石川 由紀

家庭科教育に関する検討会議の報告が出てから一年以上たつが、昨年九月に発足した教課審では、まだ家庭科についてあまり審議されてい

ないという状況だ。しかし一方では、校長会家庭部会が昨年十月に「高等学校における今後の家庭科教育の在り方」として、先の検討会議報告中、第一案（「家庭一般」の他に新しいタイプの家庭に関する科目をいくつか設け、その中から選択必修とする）を支持し、新しいタイプの科目として「現代家庭」と「生活一般」の新設を提唱した。この案については、家庭一般を女子向、現代家庭・生活一般を男子向きとして内容を展開するのではないかと

導入を考えているように思われ、家庭一般の趣旨を現行通りとして

いることを考え合わせると、男子向きとの意向がうかがえる。

家庭科にコンピューターを導入しようという動きは他にもあり、愛知県の家庭科研究会でも報告があった。又、すでに校長会では臨教審に、家庭科教育におけるワープロ、パソコン等の使用についての配慮を提言している。その他にも情報処理科的な科目の設置に対しては各方面からの要望も強いと聞いている。昨今、二案（家庭一般を含む他教科との組合せの中から選択必修）の可能性も強い。

今後の家庭科の行くえは教課審次第ではあるが、その下敷となる検討会議報告の中では、家庭科の履修の在り方を考えるに当っても多様化・弾力化に留意が必要、又、生徒の多様な能力・適性、興味・関心等に対応することなども考慮し、などの個所が、家庭科教育の充実の必要性とともにみられ、「家庭一般」は過去の母性教育に果たした役割に鑑み、現行のまま据置き、その他については多様に、弾力的に構成・運用との受け取り方もできる。

文部省の考え方を国会答弁の中から拾ってみると、差別撤廃条約批准の為の外務・文教連合審査会（60年5月30日）に於いて、高石初等中等教育局長は「従来ある家庭一般は、

どうかといえは女子を念頭に置いた教育内容（中略）いわば生活科的な分野の教育、そういうものも広げていって、その中から男女ともに選択できるような方向にした方がいいだろうというのが第一の発想である」と発言、現行家庭一般を男女で学ぶには問題があるかのようにも受け取れる節もあり、男子向き、あるいは、男にも学ばせたい科目の新設を構想し、「家庭一般」の改訂の意向はうかがえない。この日の答弁では「家庭科教育そのもののウェイトを低くするということは適当ではな

い。この日の答弁では「家庭科教育そのもののウェイトを低くするということは適当ではなからう」等の発言も多く、松永文部大臣にあっては、生活科というののも一つの見識だと思

## 討議のために5

### 「家庭科とは何か」を論じよう

―「生活科」にすべきか?―

半田たつ子

「家庭科」という名称が悪いんです。いっそ生活科学とでも名付けて、イメージチェンジしたら、すんなり男の子もやるんじゃないでしょうか。」という声を、私は十年余り聞いてきた。荒木敦氏は、84年秋の集会で「いかに生きるかを学ぶ教科だから、むしろ、生きる科」としたら」と言われた。

この二つの意見の間の幅は相当広い。その間に位置する多種多様な声を整理すると次のようになるだろうか。

①家庭科という名称は、家事・裁縫、良妻賢母主義教育の古くさいイメージをひきずっている。必修の理念に賛同しても、その教育内容がすばらしくても、家庭科を名乗る限り大勢の家庭科アレルギーの人たちをひきつけることはできない。

②家庭科を男子にも、と聞くと、男に家事・裁縫をさせるのかと強く反発される。だから、生活科学」とでも名付けければ、男性の抵抗感を柔らげることができないのではないか。

抵抗感を柔らげることができないのではないか。

③家庭科と聞くと、人間はすべからず結婚して家庭を営むべしとの前提に立っているようにイヤだ。結婚に関係なく誰でも生活はしているのだから、生活科」のほうがよい。

④家庭科より、生活科」のほうが概念が広い。家庭生活は、人間の生活の中の一部なのだから、生活科を名乗るべきだ。

⑤家庭科がめざしているのは、人間が人間として生きる生活のありようだ。生活科」又は、人間科」というほうがピッタリだ。

集会でも、世話人会でも話題になってきたが、私たちは「家庭科の男女共修をすすめる会」を名乗って運動しており、常に当面の目標を追って全力疾走中。運動の見通しがつくまで、この課題を棚に上げざるを得なかった。

十余年前、森幸枝氏と話し合った時、森氏は「家事・裁縫のイメージをひきずった家庭科が、その名称のまま男女共修として生まれ変わることには意義がある。カッコいい教科名に変えて、それなら男子もいやがらないだろう」というのはおかしい。カッコ悪い教科名でも女子ならかまわなかったのか」と言われた。当時、京都の男女共修家庭一般は、生活と家族、生活と経済、生活と衣食住の三つの柱

を立て、家庭の中に生活を組み込んでいた。

さて、最近になって無視できない提案が幾つか出された。

1. 日本教育大学協会第二部会技術・職業・職業指導部門（会報84年秋号20頁参照）  
家庭一般を生活設計を主とする2単位、生活技術を主とする2単位に分ける、と。

2. 全国高等学校長協会家庭部会  
85年10月、「高等学校における今後の家庭科教育の在り方」で、次の三科目の中から1科目を選択必修させるものとする、と。

「家庭一般」 4単位 趣旨は現行通り内容は改訂。

「現代家庭」 4単位 家族と家庭、消費と生活、健康と生活、生活と管理、結婚と育児、生活と福祉、生活の課題と実践の七項目  
「生活一般」

共通2単位 家族・家庭、保育、家庭経済  
衣食住の経営と管理

選択2単位 生活管理と情報処理（コンピ  
ユーター）消費生活と情報地

3. 神奈川県男女平等教育研究会

85年11月、学校教育で男女平等を推進するため「生活」科新設を提唱。小・中・高校を通し、全学年で男女共学とする。内容は、

社会、理科、家庭（技術・家庭）、保健体育（体育）、道徳などの内容の一部をまとめ直し、ア、生命の問題 イ、人間関係の問題 ウ、環境の問題の三大項目で構成する。

新しい「生活」科を設置するまでは、小学校では学級担任が、中・高校ではそれぞれの担任教師が、社会・理科・家庭（技術・家庭）保健・道徳などの中でこの構想を生かし、配当時間内で実践を図る。また特定の時間に複数の学級を合併し、テーマを設定していくつかの教科（科目）の教師たちでパネル式の授業をする……などと提言。

#### 4. 臨時教育審議会

第三部会では85年11月、「道徳」に他領域の科目の一部を取り込み、「生活」科または「健康」科に名称を変更することを話し合っている。

86年1月公表された「審議経過の概要」その3」には「生活」科構想は見当たらず、家庭科に関して「第二章 生涯学習の機会の拡大について」と「第四章 初等・中等教育の充実・多様化」で言及している。

第四章では、初等・中等教育で教科内容等の改善が必要なのは①道徳②小学校低学年の教科の総合化③中等教育段階での社会、技術・家庭、家庭一般④健康教育の四項。技術・

家庭と家庭一般は、共通必修と生徒の興味・関心に応じ選択しうる内容に区分して履修方法を検討する、と述べている。

生涯学習の章では、家庭の教育力を活性化するには、学校で将来親となるために必要な学習が重要であり、家庭科の位置付けや内容などを中心に、他の教科との関連を含め、見直す、としている。

全文二十一万字に及ぶ膨大な「概要」に教科・科目名は限られたものしか登場しない。男女平等をすすめるようとの視点は全く欠落している。にも拘らず、技術・家庭、家庭一般について必修と選択に内容を区分、と記した。私は「生活」科浮上せず、と直感した。有田一寿氏は、「道徳」の名称変更に関心した意欲を示したときが、この語も残っている。

家庭科なる教科を早急に生活科に改めることは、次の理由で難しい。①高校の農業教育を主とする学科の中に、農家主婦養成を目的とする「生活科」が現にあること、②家庭科教師の養成を引き受けている大学家政学部や家政学会、家庭科教育学会の同意が必要なこと、③日本生活学会が活動を始めて十二年だが、学際的な「生活学」に「生活」科教師養成を期待するのは筋違いなこと、④教員免許

など実務上複雑な問題があること、などなど。

家庭科という教科の中に生活一般という科目をつくることは可能だが、それでイメージチェンジは果たせるのだろうか？ 敗戦後、家事・裁縫の合科ではないと言い切って「家庭科」が誕生したが、中身が変わらなければ家庭科イコール家事・裁縫の認識を変えることはできなかった。名称と共に中身を一新しなければダメなのだ。

森氏とつい先日話し合った。家庭科を、「家庭生活のいとなみとしくみを学ぶ教科」ととらえる氏は、生活科・生活一般という名称にすると、日本の「イエ」制度成立までとその崩壊、そして今日の家族問題（しくみの学習）が「生活」に拡散してしまうのではないか、と言われた。

私たちは、今こそ「家庭科とは何か」、その中身を含めて、論議を尽くさなければならぬ。道徳とコミにさせられそうになったり、親を育てる教育の中心に据えられようとして、各方面から熱い愁波を送られるスキを作らないためにも。



## 討論のために6

### 臨教審「審議経過の概要」と女性民教審の批判

駒野 陽子

去る一月二十二日、臨時教育審議会の「審議経過の概要（その3）」が発表された。

昨年六月に第一次答申を発表して以来の討議のあらましをまとめたもので、第一次答申と同じく、これをもととして、四月末に第二次答申が出される予定である、という。

新聞などで、要旨をごらんになった方も多いと思うが、全部で二三ページに及ぶ大部な内容で、二十一世紀へ向けての教育改革の①基本的なあり方②生涯学習の機会の拡大③高等教育の改革④初等・中等教育の充実と多様化⑤教員の資質の向上⑥国際化への対応⑦情報化への対応⑧教育行政の見直し、の八章にわかれていた。

全体に抽象的な語句や表現が多く、具体的な提案よりも、現状分析や、べき論中心で、じっくり読み切るにはかなりの忍耐力を要するし、読み終っても、二十一世紀へむけてのビジョンはもちろん、現在の教育の問題点を

解決していく総合的な構想も浮かんでこない。臨教審が四つの部会にわかれていたために、各部会が分担した検討内容が、かなり調整された様子ではあるが、整合性を欠いたり、矛盾したりしているところも少なくない。

#### ◆家庭科については

全内容についてここで述べることは、到底不可能なので、私たち「家庭科の男女共修をすすめる会」として、特に注目しなければならぬ点を拾いあげてみよう。

「家庭科」という教科について具体的に触れているところは二ヶ所。ひとつは第二章、「生涯学習の機会の拡大」の中で、家庭教育の現状と問題点を検討した後、政策課題として、家庭の教育力の活性化のために「学校教育における、将来親となるために必要な学習の重視」をあげ、「家庭科の位置づけ、内容等の見直し」を提案している。

二つ目は、第四章「初等中等教育の充実と多様化」の中で、教科内容に触れて「中等教育段階における『社会』『技術・家庭』『家庭一般』の取扱いの検討」をあげた箇所である。

第一点の文章は「長期的、根本的には、よき家庭人となるために必要な心、知識、技能が習得できる学習体系について、学校教育、

社会教育を含め、年令段階に応じた内容・方法を検討する必要がある。学校教育において

も、このような観点から、家庭科の位置づけや内容などを中心に、他の教科との関連を含め、見直す」となっている。そのあとにすぐ「親および、親となる者を対象とする学級などの社会教育の効率化」が続く。「家庭科」をどう位置づけ、見直すか、の具体的な案はひとつも書いてない。

第二点は「中等教育段階における『社会』『技術・家庭』『家庭一般』の取扱い」として、「『技術・家庭』『家庭一般』については、共通必修にわたる内容と、生徒の興味・関心に応じ選択し得る並容とに区分して履修方法を検討する」となっており、これも具体案がない。

要するに、具体的な案は、現在、審議中の教育課程審議会にげたを預けてしまう意図であるようだ。

したがって、私たちが今後、具体案について要望し、交渉する相手は教課審、ということになる。

しかし、臨教審の概要に述べられている家庭観、家庭像には、見逃すことのできない多くの問題点がある。

#### ◆女性民教審では

て育児ができる対策については、全文中たった六文字「保育所の充実」が挿入されているにすぎないのも、臨教審の家庭観が、まさに性別分業家庭以外の何ものでもないことを示している。婦人の十年を終えた今、批准された女子差別撤廃条約の提起したものはどこに活かされているのだろう。

女性民教審では、発足一周年を期して、同封のチラシのような催しを開くが、「女たちの教育改革」の提案の中で、この問題を鋭くつき、家庭科教育のあるべき姿を提起していくつもりである。「共修の会」のみなさんと共に、女性民教審も教課審への働きかけを強めていく決意を固めている。

#### ご意見をどうぞ！

「あるべき家庭科」についてあなたは  
どうお考えになりますか？  
これからどのように運動を展開して行ったらいい  
でしょうか？

四・五集会に参加できない方は、どうぞ郵便で事務局あてにご意見をおしらせ  
ください。

「共修の会」の世話人である半田たつ子さんと樋口恵子さんと私を含む「女性による民間教育審議会」では、臨教審の家庭観、家庭像について批判が集中した。女性民教審は、以前から「国が家庭を新しい国家づくりの基礎として、性別役割分業家庭を固定化する構想をもっていること」を批判してきたが、今回の審議の概要によって、それがますます明らかになってきたことを許し難く思っている。

第二章では、「家庭・学校・地域の連携」が強調されているが、現在の教育荒廃の背景として、「家庭の問題点」を次のように分析している。①家庭形態の変化による世代間交流および育児知識の伝承の不十分さ②子どもの数の減少による異年令の子どもの同士の接触の不足と親の過保護・過干渉③女性の社会進出に応じた育児と職業生活両立のための条件整備の不十分さ④父親の存在感や、育児、教育への参加意識の希薄化⑤社会が経済的に豊かになったことにより、文化生活を志向し、価値観が多様化する一方、親の育児不安や放任が生じていること⑥家庭の教育観が学歴偏重、知識偏重、偏差値偏重となっていること⑦近代文明社会の進展に伴うひずみとして、心豊かに生き、日々の生活を紡ぐという家庭生活本来の意義の軽視……などである。

こうした家庭の現状が、戦後の高度経済成長や競争社会化から起ってきたことへの指摘なしに、ただ、現象のみをあげるに留まっている点がまず問題だ。また、それを改善するための家庭教育の役割として、「親子の信頼関係、特に乳幼児期における母子の絆による基本的信頼関係の確立」「乳幼児期から児童期にかけての基本的生活習慣を身につけるしつけ」「幼児期、少年期、青年期における自立性の形成のための親の援助」をあげているが、文脈から見ると、つねに親とは母親を想定し、その補足として、「父親もその役割を果すべきである」と述べているにすぎないのだ。

これでは、家庭教育の役割＝母親の役割、と言っているのも同じと受けとれる。

だからこそ、わずかな具体的提案の中に、「学校給食への母親の参加」「手づくりべんとうの日の設定」などが出てくるわけだ。

「乳幼児期に母親が安心して育児に専念できるように、父親は母親の精神的な支えとなる育児参加を」といった文からは、育児の実際のな仕事は母親がするのが当然、という考えが浮び上ってくる。社会的な対策として「育児休業・女子再雇用制度の推進」「離職期間中の能力開発のための教育訓練の充実」が強調され、女性が働き続けながら、安心して



# 教 研 集 会 報 告

## 家庭科分科会

保科 達子

去る一月十九、二十日、日教組・日高教合同の教育研究全国集会在大阪で行われ、家庭科分科会に助言者として参加する機を得たので、その概要を報告する。

まず、家庭科をめぐる情勢、研究の動向、今次教研の課題について基調提案が行われ、次いで、①子どもや家庭・地域の場合、さらには臨調体制の影響と家庭科、②「女子差別撤廃条約」と家庭科、③男女共学の取り組みと課題、について全体討議を行った。

それらをふまえて、小・中・高別の小分科会では、①どんな学力をつけるために、どのような実践をしたか、また自立した生活者を育てる為の男女共に最低必要な教育内容は何か、②男女共学問題にどのように取り組むかを主な柱として討議を深め、最終日に再び全体会を持って成果の確認や意志の統一をはかった。

教育内容にかかわっては、①衣食住に関し

ては、原材料から(まで)たどる方が、理解され易く経験も豊かになり問題に迫りやすいという事の共通認識を得た。しかし、方法論としては生産から消費までを追う方法と、現在起っている問題に直ちに斬りこむ方法の両論があった。②保育については生命の発生から扱って命の尊さを教える必要が確認された。共学問題にかかわっては、いわゆる乗り入れや部分共学ではなく、一貫した全面共学でなければ真の成果となり得ない事が数多く語られ、全面共学必修が再確認された。

最後に一人一分スピーチのあと各助言者等からの発言があり、①役割分業差別の再生産は日々行われているが、その中の男女共学家庭科を「人権」としての家庭科教育と捉えた事は前進である。②臨教審のいう自律、自己責任等の発言の巧妙さ、紙一重の相違を知性と力量によって見破り、また個人の尊厳の視点の確立によってとりこまれぬ対応をすべきである。③教師自身の内なる差別意識を克服し、また男性教師、技術科教師等もまきこみ、組織的に共学に取り組むべきである。などが語られ、明日からの新たな実践と、課題

への取り組みを約して散会した。

## 女子教育分科会

木下 雅子

教育研究全国集会は大阪府下各地で開かれた。

私は女子教育分科会(堺市)へ家庭クラブの問題を訴えたくてレポーターとして出席した。全国各地から女性労働者のきびしくなる一方の現実が報告され、その母親の姿を見た女生徒が、いつかは玉のこしに乗りたいたいと思うようになってゆく実情が語られた。

討論の中から、子どもたちにはしっかりと差別を見ぬく力、それをのりこえてゆく力をあらゆる角度からつけてやらねばならない。一人一人が自立して連帯してゆく方法、歴史の学習を通して……等々。

連日250人を越える参加者の中で、各県代表は懸命に自分の教室での実践、学校での指導を長々と報告するのであるが、私は子どもへの指導もさることながら「団結すらできないでいる女たちと共に憤り、共にたたかう教師にならなければ本ものではない」という藤井治枝氏(助言者)の指摘が胸につきささった。今年家庭科の男女共学をめぐるレポート

が少なかったが、今まで「まず自分の学校から」といった形で実践されてきた共学へのとりくみが、県全体の組織的とり組みへと変化しつつあることが報告された。性別役割分業の意識がなじがらめられている子ども(おとなも)たちに、労働をどう教えるか、性をどう教えるかで、この分科会は多くの時間を費した。女子だけ集めて家事・育児を学校で教えている現実を何とかしなければ、一方で積み上げたものが一方でこわされてゆくことになるのと、私はとてもあせってしまった。

わずかに与えられた発言の機会に「家庭クラブ」という女子高校生組織(42万人)が毎年全国大会なるものを華々しく開いて、『女は家庭』意識を植えつけてきた。これは文部省、教育委員会、産業界が強力にバック

## 新パンフ好調

教研集会では売店を出すことはできませんでしたが、一人一人に手渡すかたちで新しいパンフレット「家庭科、なぜ必修? どんな必修?」を売ったところ、持参した分はたちまち売り切れ、「もっと持って行けばよかった」と、参加の世話人はくやしがりました。

## シンポジウム

### 「21世紀への展望と女子の高等教育」

—女性解放を教育に持ちこむべきでない?—

大西 歩

11月30日、日本女子大学女子教育研究所設立20周年記念の公開講演とシンポジウムが催されました。講演は「21世紀への展望と今後の教育」という演題で、永井道雄氏が、(1)日本の産業社会における変化、(2)国際社会の変化、国際協力、(3)教育でのアプローチの3本を柱に、(3)では、21世紀への準備として、①

企業内研修などの経済教育システム、②テレビ・ラジオなどのメディア教育システム、③学校教育システムの三つがどういう影響を与えるかを関連させて考えていくことが、世界の中で日本文化が対応できることになるのではないかと提言がありました。

シンポジウムは「21世紀への展望と女子の高等教育」というテーマで、シンポジストは縫田暉子さん、村井実慶応大学教授、青木生子日本女子大学学長の三氏、司会は一歩ケ瀬康子日本女子大学教授というメンバーでした。縫田、村井、青木の三氏はすべて、教育課程審議会の委員です。

縫田暉子氏は、49、51年、オハイオ州立大学でマスコミ文化を一年学ばれたそうですが、そのときの留学生千九十七人のうち女性は百余人で、その後、男性は社会の中心的なところで活躍しているけれども、女性は活躍していないことを『朝日ジャーナル』、「女の戦後史」で知らされたということです。その話をいとぐちに、高等教育を受けた女性が社会で活躍していないこと、女性が家庭生活をしながら、社会での役割をはたさなければならぬことを指摘されました。

村井実氏は、慶応大学付属女子高校の校長の経験者とのこと。その社会で生きるための教育をすることは「状況主義」であり、女子

教育は「状況主義」の被害者であるとし、21世紀は新しい世紀と考え、新しい女子の教育を考えていきたいと話しています。また、状況主義・国家主義を超えるために、子どもたちが生きている一人ひとりの人間として自分の生き方をさぐりながら考え、どのように力を貸していくのが教育であるとし、女性が人間として存分に生き、自己を開発し、創造することを指摘されました。しかし、状況主義の概念についての質問に答えて、女性の解放の問題をストレートに教育の中に持ち込むことは社会の流動に適應することだから、そうしない考えだと話されました。

青木生子氏は、総理府の意識調査、女性の地位向上、「男はしごと女は家庭」に同感する、しない、女性への職業意識などの数字をあげ、21世紀は不平等のない社会に限りなく近づける努力をすること、女子の再教育、自由な自己実現のための生涯教育の必要性を強調されました。

村井氏の、女性解放の問題を一時的な状況ととらえる考え方には、差別の歴史を継続することではないか、差別をしないことが教育の基本ではないかとの疑問が今も頭の中によんでいます。

## 家庭科の男女共修を すすめる会

### 関西グループでは

林 弘子

ここ2・3年あまりめだった活動をしてこなかった我々の会も、ようやく昨年の12月11日に半田先生をむかえて集会を開くことができました。まがりなりにも差別撤廃条約が批准された今こそ、制度的にきっちりとした家庭科の男女共修をかちとっていかなければなりません。このような問題意識で開かれた会に、多くの仲間が集まりました。条約の趣旨から家庭科の男女共修を否定しにくくなったものの選択制がでてきたり、校長会のまきかえし内容が我々の考えているものと違うものがでてきたりなど、まだまだ運動をしっかりとがんばらないと我々の考えているのはまったく違う方向に行ってしまうそうなのが、半田先生の方から興味深く話されました。

その後、教育課程審議会委員への要望書及び署名を採択しました。

我々の会は、名簿にあげている人数で80名でいのですが、地域的に広範囲で例会ではなかなか集まりが悪く、講演などを含めた大

きな集会で、多くの人々を集められるという状況です。男女共修を完全に実施できている大阪の西成高校のような例もありますが、実施できても選択制とか、2単位だけであるのが現状です。問題提起をする人がいても、体育との関係や進学の問題などが壁になって実施できないことがあります。何よりも家庭科の教師の意識がそこまではない場合が多いように思われます。

我々の会として府教委等との交渉はできていませんが、他団体の交渉によると、府教委は指導要領を踏しゅうするというのみで積極的に推進する姿勢がまったくみられないとのことでした。我々の会では、集会後開いた今年1月11日の例会で、関西在住の審議会委員長の福井、委員の広中氏にはたらきかけをすること、各府県の会員に研究会へのはたらきかけを依頼すること、各教組及び婦人部に署名の依頼をすることを決めました。他の運動にかかわっている人も多く、動きがどうしても悪いのですが、息の長い運動を続けていこうと話合っています。

★各地の状況をおしらせください。原稿はなるべく一四〇〇字以内(タテ書)、はがきでひとことでも結構です。  
(編集部)

## 高P連会長は 共修賛成!

—抗議署名を手渡して—

関 千枝子

全国の高校PTAの連合組織、全高P連の第34回大会決議(1984年8月)を見た時は驚いた。この決議は家庭科の共修運動を進める皆さんはすでにご存知と思うが、念のため説明すると、①国民道徳の低下は道徳教育の欠如、学校行事で日ノ丸、君が代を。②社会環境浄化のため低俗出版物、放送等の規制を。③家庭の乱れを正すため、高校家庭科の現行形態(女子のみ必修)を守れというものである。

その前のバイクに乗らない、乗らせない決議の時はバカらしいと笑っていただけの私だったが、今度はだまっていられないと思った。といってどうするか。自分の書けるものには書いた。よその方が書いた投書も見た。「家庭科の共修をすすめる会」その他の団体の抗議文も見た。しかし、こんなことで高P連がさして打撃を受けると思えなかった。私は高P連に異議申し立てをしたかった。決議は高P連三百万会員の名で出されているが、三百万会員の中には反対者もいる(私自身も会

員)。さらに重要なことは、この決議の討議はおろか、大会があることすら一般会員の知らない中で、一部の幹部の意向でことがすすめられている非民主的運営である。

私は抗議署名運動を思い立ち、全国的な団体にも話をもちかけたが成功せず、結局、運動の提案を投稿する形となった。半田たつ子さんがすぐ賛成してくださったのは反応がなく、あきらめたところにもう一人賛同者が出、結局、三人で、全国署名運動に乗り出した。

署名簿が出来上ったのが六月の末、個人から個人へと頼る署名運動、こんなことでどうなるのかと思ったが、結局は二万九千余人の署名が集ったのだ。決議のひどさと、右傾化を怒る、民主主義の根がしっかりとあることを痛感した。

署名は35回大会(1985年8月)の開かれた札幌に行き、高P連幹部に渡した。このとき、小島高P連会長らは、君が代、日の丸に関しては一歩も退かぬかまを指示したが、他の項目に関してはあいまいだった。家庭科共修問題に関しては、「私も共修大賛成、選択に反対なのだ」という。「決議文からはそれは読みとれない」「文面はどうでも真意はそうだ」珍問答である。おかしくなって「今年の決議文に共修積極支持を盛りこんでは…

…」といったら、それは……と言葉を濁した。この少しあと、神奈川のある県立高校で男子生徒が中心になり「男子に家庭科は必要か」という会を開き、小島会長(神奈川在住)をひっぱり出したが、このときも小島氏は同じようなことをいい「あれは校長会の意向を受け急遽入れたが、(抗議をうけ)こりた」ともらしていたとのこと。

ことしの大会で、小島氏らは、高P連を文部省の頼りになる、国と手を携えて進む団体にするということを随所で強調していた。家庭科の場合、結果的に文部省より後向き、という形になったので、態度軟化ということではないだろうか。しかし、高P連のこうした姿勢が文部省の高姿勢な君が代、日の丸通達あるいは、あいまいな家庭科への結論への一つの因、支えとなっていないだろうか。三百八十万(今年度)団体の数量的力は大きい。

私は、会員が無関心、無自覚に入っている巨大団体の怖しさをしみじみ感じる。これらの団体が翼賛化しようとしているとき、日の丸、君が代、家庭科の問題だけでなく、あらゆる面で監視と「異議あり」の声をあげることを必要を考えている。

(全国婦人新聞記者)

# 国際婦人年日本大会の 決議を実現するための

## 連絡会報告

和田 典子

### A 大会決議の申し入れ

昨秋11月22日の日本大会の決議を関係省庁に申し入れる行動は、国会スケジュールや内閣改造などの都合から大幅におくれましたが、ようやくすみはじめました。

労働省(12・19) 法務省(1・8) 厚生省(1・16) 文部省(1・29)への申し入れが終り、引きつづき各省庁のほかNHKや民放関係などの民間組織への申し入れも行なう予定です。

文部省へは、大羽綾子世話人のほか、野口敏子(大学婦人協会) 阿曾のぶ子(有権者同盟) 升本順子(家庭生活問題研究協会) 山家和子(日本母親大会)と和田典子が出かけ、大臣官房政策課長はか初中局、社会教育局関係官と約一時間にわたって会談しました。

家庭科の共修は実現にむけて教課審で検討中とのことで新しい動きはつかめませんが、臨教審の審議経過の報告(その3)に

は「大会決議」にてらして、基本的にも具体的に問題があることを述べ、再検討を要請しました。(たとえば母子関係の強調、学校給食もんだい、政治教育の軽視など)

### B 婦人問題企画推進本部の構成がえ

総理府の婦人問題企画推進会議は廃止されますが、「本部」は存続することになり、全省庁の事務次官ほか二名が本部長、首相、官房長官が正副本部長という構成になります。また「会議」に代って、必要に応じて有識者の意見を求める席を設けることになります。

### C 日本大会の収支決算

収入総額 五、三一四、八八五円  
支出総額 三、七九一、二八一円  
差引残高 一、五二三、六〇四円  
なお、残金の使途については協議の上決定する予定です。(カンパをおよせ頂いた方に厚く御礼申し上げます。)

### D スライドの貸し出し

日本大会で上映した「国内婦人の10年の歩み」スライド(解説つき)は、三〇〇〇円で貸し出します。  
ぜひ利用して下さい。

### E 「四八団体連体のあゆみ」刊行

四八団体の10年の歩み(75年、85年の時系列と問題別の内容と活動、各種資料など)、日本大会の記録、団体紹介、年表などを編集した単行本を、五月上旬をめどに発行します。

### F 当面の活動

①「雇用機会均等法」の四月実施にむけて労働省令及びガイドラインが固まったので、そのヒアリングを近日中に実施する予定です。  
② 売春防止法を大幅に改訂する動きがあり、それをめぐって、風俗営業法で間に合うとか、売買の両罰法にせよなどの意見が出されていますので、七婦人団体が主催する現場の相談員からのヒアリングの会に、積極的に参加することになりました。

### G 今後の組織運営について

二〇〇〇年にむけて、NGOの任務がいつそう重視されている情勢からいって「連絡会」の継承、発展をはかる必要が確認され、組織運営について検討することになりました。

H 国連、婦人の地位委員に有馬真喜子さんが就任しました(縫田さんの後任です)。

## 世話人会報告

△十二月二十二日▽

●世話人会は冬号発送作業と同時進行で報告協議。

●教課審委員の青木生子氏との会見報告。資料を読んで下さり「一問一答」がおもしろかったという青木氏は大変まじめで慎重な方という印象。又同委員の村井実氏は、女子高等教育シンポ(11/30)で「男女平等について教育に持ち込む必要なし、教育が社会の変動をいちいち追っかける必要なし」と発言したという報告に一同ア然。(12ページ参照)

●四十八団体の日本大会は二千人参加。大会後、二千年にむけての具体的な運動の検討に早速とり組むもよう。

●検討会議の後の各地各団体の動きの中で、「生活科」という名称と内容が出されてきている。神奈川県、校長会など。会として「生活科」構想にどう対応するか今後の課題であることを確認。

●教研の日程決まる。新一問一答パンフ進行状況。実践部分はこの時期だからこそ、よいものにと教研日程をにらみながら練る。

●次期総会の役割分担と集会内容について。

●渋谷駅前のポストを会報で満腹させた後、一九八五年をふりかえる会会場「じょあん」へ。

名古屋の宮崎さん、江田事務所の湯川さんも入ってにぎやかに、美酒好料理に舌鼓。宮崎さんからは、名古屋ではコンピューターを「家一」にどう導入するかの授業研究がすめられていること、湯川さんからは、リベラリストを繋いでのしなやかな運動構想を聞き、みんな好顔好気分で散会しました。

(芦谷 薫)

△一月五日▽

### I パンフレットの作業

目次と二つの授業例について検討、内容のすべてが決まりました。

### II 情報交換

四十八団体の動き(14ページ参照)や教課審の審議状況(2ページ参照)について聞き、教課審委員に関して情報を交換しました。

### III 決定したこと

- 48団体の文相訪問時に署名を持参すること。
- 教課審委員一人々々にできるだけ会うこと。
- 集会では話し合いの時間をなるべく多く。
- 電話で一人々々に集会への参加よびかけを。

### IV 話し合ったこと

85年度総括、86年度運動方針案のために話

し合いました。「全国交流会をやろう」「本を出そう」「パンフを売ろう」「会報をセツトで売ろう」など。一番大きな話題は、「皆が忙がしい中で、家庭科の運動にどうエネルギーを集めるか」ということでした。

(梶谷 典子)

△二月八日▽

一、四月五日の総会、及び集会のテーマ、報告者、当日の役割分担等を決める。出来るだけ多くの人に電話等で呼びかける。

二、新しいパンフ「家庭科、なぜ共修?どんな共修?」の訂正個所のチェック。

パンフは日教組全国教研でも大変な人気。三、四八団体一月二十九日文部省へ日本大会決議及び宣言について申入れ、共修の署名も約一万名分大臣に提出。

四、臨教審の報告に関して差別撤廃条約の精神を守ること等要望書を提出する。

五、教課審の専門委員の人選についても文部省に要請文を出す。

六、四八団体の世話人が降りたいとのこと、新しい世話人の選び方、組織のあり方について意見交換をする。

七、署名をもっと集めて欲しいこと。

八、新しい世話人の確認をすること。

(中嶋 里美)



## 署名をありがとう

ございました

事務局 北郷 知子

今年に入ってから寄せられた新しい署名は  
一三〇〇名を超える数にのびりました。

内容を前回の署名と合わせてみると、まず地域的には、会員の数が多い関東圏からのもの、関西、中部と続いています。実質的には文字通り全国各地から届いております。先日、北海道の方が仕事の合宿の折に集めたという署名用紙や、四国、仙台、熊本からのものも届き、様々な場所での会員の方々の活躍がうかがえます。

次に、署名層をみると、高教組の婦人部からのもの等、「家庭科の男女共修」を望む現場の声ともいえるべき、学校関係の方々が圧倒的に多くみられます。その他にも、御自分の職場の仲間や、友人、家族で署名して下さったものもずいぶん届いています。中には、別の女性運動をしながら、会の趣旨に賛同して署名を送って下さった方もいたり等々、会員の層が多岐に渡っているのを実感しました。

印象的だったのは、今は亡き、尾藤操さんが送って下さった手作りの署名用紙です。小さな紙にびっしり名前が書き連ねてあり、

## 家教連でも署名運動

家庭科の共学・必修を求める家教連の新しい署名運動は昨年十一月に始まってもう

みているだけで嬉しくなる様な用紙でした。

また、絶対数はまだまだ女性が多いのですが、最近では男性の名前も多くみられ、家庭科の共修が男女を問わず、幅広い層から望まれていることがわかります。この様な幅の広い層の厚い会員の方々の協力に支えられているのだから、今度こそ共修が実現されることを確信しています。

第三回めの署名はまだ続けますので、どうぞお送り下さい。用紙が必要な方は事務局へ郵便でご請求下さい。

## 事務局担当がかわりました

北郷知子さんから石川恵子へ

はじめまして。三月から事務局を引き継ぎました。十九歳になったばかりの未熟者の極みですが、周りの人からの御指導を受けながら、事務局の仕事をしつつ自分も育っていききたいと思っています。母（当会の世

★連絡先 〒158東京都世田谷区上野毛四一十九一十二 ☎〇三三七〇一一八五七八

六千名分に達しています。本会と趣旨はほぼ同じですが、別の運動ですからそちらにもどうぞ協力ください。

## 【おねがい】

★運動の理解者をふやすために、新しいパンフレット「家庭科、なぜ共修？ どんな共修？」をどんどん売って下さい。事務局に郵便で申しこんで下さればお送りします。

一部三〇〇円送料一七〇円です。

★世話人になって下さい。

フレッシュでエネルギーが豊富な方に、各地域での運動の中心になっていただきたいと思っています。首都圏の方もどうぞ。三月中旬に事務局または世話人にご連絡下さい。

話人）の手伝いで、「家庭科共修」との付き合いは長く、運動の大変さも少しは分かっているつもりですが、きつと戸惑うことが多いと思います。不行き届きの節はどうかびしびしと御指導の程、よろしくお願い致します。

石川 恵子